

## 宵待草の少女へ

鈴木秀夫

埼玉県・六五・無職

K子さん。やっと男鹿半島にきました。

あなたが男鹿に去って半世紀、あのとき一七だった私も頭に霜を見ました。

あの夜、男鹿にある母の実家に行くと言われたとき、愕然としました。一億玉碎を目前にしての疎開とはいえ、少年の私にとっては、つらく哀しい出来事でした。いえ、それを恨むものではありません。あなたとて悲痛な思いで行った男鹿半島でしたものね。

戦争で生まれた出合いは、また戦争によって失う運命をもっていたのでしよう。検査課であなたが座っていた椅子が、片隅に寄せられるのを茫然と見つめておりました。残念なのは男鹿からの便りに、住所が書いてないことでした。田舎のことですから、異性からの文は避けたのでしようが、返事を書けない私にすればじっと耐える日々でした。ハーモニカを手にとると、寮の窓辺に腰をかけ、「宵待草」を毎夜のように吹

きました。

今にして思えば、明日の命もしれない戦争末期に、生きる証を、人を愛する喜びを与えてくれたあなたの存在でした。そして、戦後の苦しみ、挫けようとする私を支えてくれたのもあなたの面影だったのです。しかし、あなたはもういない。風の便りで知った計報が信じられず、勤めていたと聞く新聞社に問い合わせ、骨ガンに侵されていたと知ったときの驚き。手すら触れることのできなかつた恋、人目を気にして、白日のもとでは歩けなかつた私たち。浅かった春に悔やむことばかりですが、だからこそ、私の胸から消えないのかもしれない。

覚えていますか。あなたの手紙に、こんな一節があつたのを。

夕日の沈む日本海はともきれいで、一目でも見せたいほどです。私はつらくなくと海に向かい、あなたのハーモニカを思い出し、宵待草を歌うのです。

今日は、私が日本海に向かって歌います。そちらに届くのを信じて、あの宵待草を。

\*戦争末期、軍需工場である少女と恋におちりましたが、彼女は敗戦直前に男鹿半島に疎開してしまいました。少女の死を知ったのは、二〇年後でした。